



元気っ子

No.282 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

コロナウイルス感染症が鈴鹿市内でも猛威を奮っています。より一層の危機感をもって日々の保育にもあたって参ります。職員にも少しでも体調に異変があるときは躊躇することなく休むように伝えてあります。保護者の皆さまにおいても、体調に異変のある方は送迎を見合わせて（他の方をお願いして下さい）頂きますよう宜しくお願い致します。

コロナウイルスが保育の中にもたらした影響はネガティブなものばかりですが、あえてプラス思考で考えれば、日々の保育や行事などが持つ本質や目的、意味を見つめ直すきっかけを与えてくれたらと思います。色々なことが「今までと同じように」は出来なくなる中で、かたちを変えてでも実行していこうとするためには、そのものがもつ「目的」をはっきりとさせなくてはなりません。そういう意味では今年度は本当にたくさんの方のことを考えさせられましたし、勉強もさせてもらいました。

かつて保育園は家庭の替わりでしたが、少子化が進む中、その役割は子どもの成長に必要な「多様な子ども集団の形成」に変わってきました。そして保育の「目的」は「子ども自らが育とうとする力を支援すること（発達を保障すること）」です。この根拠は近年の脳科学の研究によって明らかにされていますが、「シナプスの刈り込み」という言葉で説明されます。要は乳児期に大人が必要以上に過干渉になると、子どもは「これは大人がやってくれるから自分でできるようにならなくてもいいんだ」と脳が判断するようになってしまうということです。そしてこのシナプスの刈り込みについては1歳くらいまでにピークを迎えると言われています。また、脳の感受性の育ち（感情のコントロールなど）についても4歳半くらいまでにピークを迎えると言われています。このことから、いかに就学前の生活が大切か、また保育園が担う役割の大きさが分かります。

また、アメリカのオックスフォード大学のオズボーン教授は2040年には今の仕事の約50%が消滅し、人工智能に置き換わっているとの研究を発表しています。そのような中でも残ると考えられている仕事に求められる共通の能力は「高い社会性」と「非認知能力」だと言われています。この「非認知能力」とは「自分自身を動機付け、挫折してもしぶとく頑張れる能力」「衝動をコントロールし、快楽を我慢できる能力」「自分の気持ちをうまく整え、感情の乱れに思考力を阻害されない能力」「他人に共感でき、希望を維持できる能力」などです。

このことから保育園において、大人も子どもも多様な人間関係の中でこういった力を育ていける保育を目指していく必要があります。楽しければそれでいいで終わることのない、楽しい中にも目的や意味を持たせた保育や行事を、今後は展開していく必要があるように思います。そのためにも職員みんなで話し合い、学び合いを重ねながら、このコロナ禍の中でも充実した保育が展開できるよう力を合わせて前進していこうと思います。

